

大溝城遺跡の発掘調査

織田信長と大溝城

大溝城は高島郡支配の拠点として、天正6年（1578年）に織田信長の甥である織田信澄（のぶずみ）によって築城されました。設計は、明智光秀と伝えられています。

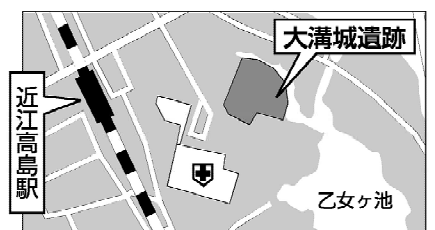
織田信長が、高島郡支配の拠点として大溝に城を構えた理由には、水陸交通の要衝であり軍事面で重要な地点であったことや、琵琶湖の支配権を掌握する目的があったと考えられます。

近江には、織田信長の安土城、織田信澄の大溝城、羽柴秀吉の長浜城、明智光秀の坂本城など琵琶湖に面して築かれた水城が存在しますが、信長は、これらの城をおさえることで、琵琶湖の支配権を掌握することができました。大溝城は、その一端を担う拠点となる城郭であり、重要な役割を担っており、安土城と同じ文様の瓦を使用していることから、築城には織田信長の影響を大きく受けていたと考えられます。



大溝城の明確な遺構は、地表にはほとんど残っていませんが、天守台跡と考えられる石垣が乙女ヶ池（内湖）に隣接していることから、内湖を巧みに利用した水城としての景観をそのまま残している重要な遺跡であり、琵琶湖の支配権の掌握を重視して築城されたことが

現在の姿からもうかがえます。



見え始めた大溝城の姿

現在、大溝城遺跡本丸跡の範囲を確認する目的で、平成27年度から発掘調査を行っています。

その成果として、本丸跡の西端部と北端部で、外郭ラインを示す石垣が発見されました。これらは、古絵図の位置とほぼ一致して発見されたことから、地下には遺構が良好な形で保存されていることが分かり、重要な発見となりました。昭和58年度の調査で発見された本丸の東端部の石垣の位置と整合させた結果、本丸の東西の規模は、約58メートルであることが分かりました。北端部の石垣は、クランク状にほぼ直角に曲がる形で発見されました。また、階段状になっていることから、琵琶湖から直接

上がることもできる構造であったと考えられ、船着き場の可能性もできました。

平成27年度の調査では、水城の様相の一端が明らかにになるとともに大溝城の姿がおぼろげながら見え始めてきました。現在、北端部のクランク状に曲がる石垣の延長がどうなっているのか確認すること、また、南端の外郭ラインを確認することを目的に発掘調査を実施しています。

今後のさらなる発掘調査の進展と絵図等の検証により、大溝城遺跡の範囲や構造などが明らかになることが期待されます。

図文化財課

☎(32) 4467

編集 雑感

コートを手薄のものに変える日が増え、少しずつ春を感じられる季節になりました。

春と言えば、私は毎年、家族と夜桜を見に行く事が恒例となっています。その日あったことを、桜を見ながら話したり聞いたりしているうちに、だんだんと心が落ち着いてきて、明日も頑張ろうと思えます。新しい物事が周りにあふれる時期です。普段の生活から少しだけ力を抜いて、春の風景を探しに行きませんか。(M)



広報たかしま

平成29年

4

月号

No.207

発行▼高島市 編集▼政策部秘書広報課
〒500-1001 滋賀県高島市新旭町北畑565番地

☎0740(25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

朽木氏の威厳を伝える旧興聖寺跡

こうしやうじ

興聖寺のはじまり

現在、朽木岩瀬にある興聖寺の起源となる旧興聖寺跡は朽木の上柏集落の南方に位置する指月谷に所在しています。林道を登ると、山の斜面を削り造られた平坦面や墓石などが見て取れ、今もなおその名残をとどめています。

「興聖寺年譜」によると、近江

源氏として有名な佐々木信綱が承久の乱で活躍し、その恩賞として朽木の地頭の職を得たとされています。嘉禎3年（1237年）、信綱は曹洞宗の開祖道元禪師より、承久の乱で戦死した一族を供養するため寺の建立を勧められました。これが興聖寺の始まりとされています。そして仁治元年（1240年）には、道元が寺院を開いた京都深草の景色に似た上柏の指月谷に七堂伽藍といわれる

仏堂・法堂（本堂）などをはじめとする各施設が建設され、前身の旧興聖寺が完成したとされています。

興聖寺の役割

佐々木一族は地名を家名とし、「朽木家」と名乗るようになります。朽木家は26代領主朽木之綱のときに明治維新を迎えるまで、実に鎌倉・室町・江戸の各時代、約600年間に渡って朽木を治めることとなりました。

その中で興聖寺は、「朽木文書」によると、15世紀後半以降の土地の買主の役割を朽木家に代わって担っていたとされています。このことから中世の興聖寺は朽木家の菩提寺としての保護を受ける一方、土地の管理等を行う役割としても機能していたと考えられます。

朽木家墓所

指月谷の林道を進んでいくと旧興聖寺跡の入り口にさしかかり、最初に朽木家の重臣や一族が眠る家中墓が見られます。その奥には七堂伽藍といわれる建造物の跡と思われる平坦地があり、朽木家墓

所はさらにその奥、この平坦地の石段を登ったところにひっそりとたたずんでいます。

墓所には江戸時代の朽木家当主16代元綱、20代周綱、22代朝綱の墓と、いくつかの五輪塔と石灯籠が並んでいます。墓石の特徴や墓石を囲む石列からは、当時、朽木を治めていた領主の埋葬文化と、かつての寺の威厳を感じることができます。

文化財課 田 (32) 4467



朽木家墓所の様子

収蔵資料整理のお知らせ

文化財課では、市内6か所に収蔵している民具の整理作業を進めています。作業では、経年劣化や腐食、破損により修復や復元が困難で文化財的価値を失っているものや、時代的に新しく、歴史的価値を有していないものを主に整理、処分していくこととなります。限りある収蔵スペースで、これからも大切な資料をより多く後世に伝えるために、必要な作業となります。

皆様のご理解とご協力をお願いします。

編集 雑感

皆さんは日頃体を動かしていますか？今回、表紙でも紹介している「FAIRY TRAIL」の取材に行ってきました。「FAIRY TRAIL」は、最長60km・標高差計4000mもアップダウンのある朽木山中を走り回る過酷な競技にもかかわらず、参加された皆さんは本当に楽しそうにコースを走り、カメラを向けると笑顔やポーズで応えてくれました。楽しそうに走る参加者の姿を見て、「僕も走れるかもしれない」と錯覚しそうになりますが、いきなり山道は難しそうなので軽い運動から挑戦してみます。(H)



広報たかしま

平成30年

7

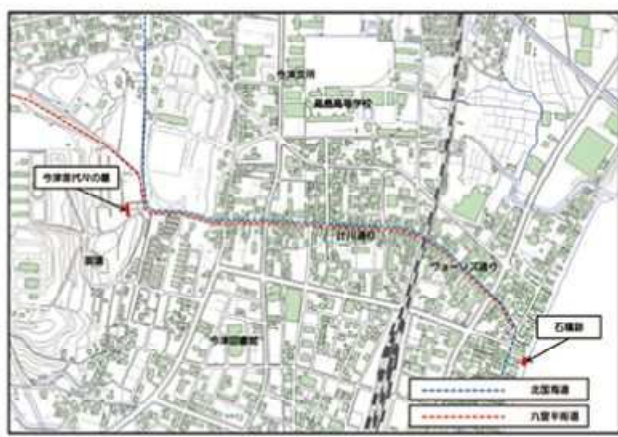
月号
No.222発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒740-1562 滋賀県高島市新旭町北畑5-5番地☎0740(25)8000代
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

高島各地にある大名飛地領

市内の大名飛地領

江戸時代の高島市域は、大溝藩分部氏が南部地域の大半を治め、鎌倉時代から続く朽木氏が旗本として朽木地域と今津地域の一部を治めていました。その他の地域では、幕府の直轄地（天領）や他藩大名や旗本の領地（飛地領）が多く入り混じっていました。市内の大名飛地領の例としては、膳所藩（大津市）、堅田藩（大津市）、小

浜藩（福井県小浜市）、甲府藩（山



梨県甲府市）、館林藩（群馬県館林市）、郡山藩（奈良県大和郡山市）、加賀藩（石川県金沢市）などがあげられます。ここでは加賀藩の飛地領について紹介していきます。

加賀藩領

加賀藩の前田氏は、今津町今津・弘川、マキノ町海津の一部に飛地領をもっていました。加賀藩の領主支配は、豊臣秀吉から前田利家に、京への往來のための宿泊地として今津と弘川が与えられたことから始まります。今津は北国海道・九里半街道が通る交通の要衝で、利家の上洛の際や三代藩主利常の大坂の陣の出兵時にはここを経由していたと伝えられています。飛地領では在地の代官が支配を行うことが多く、

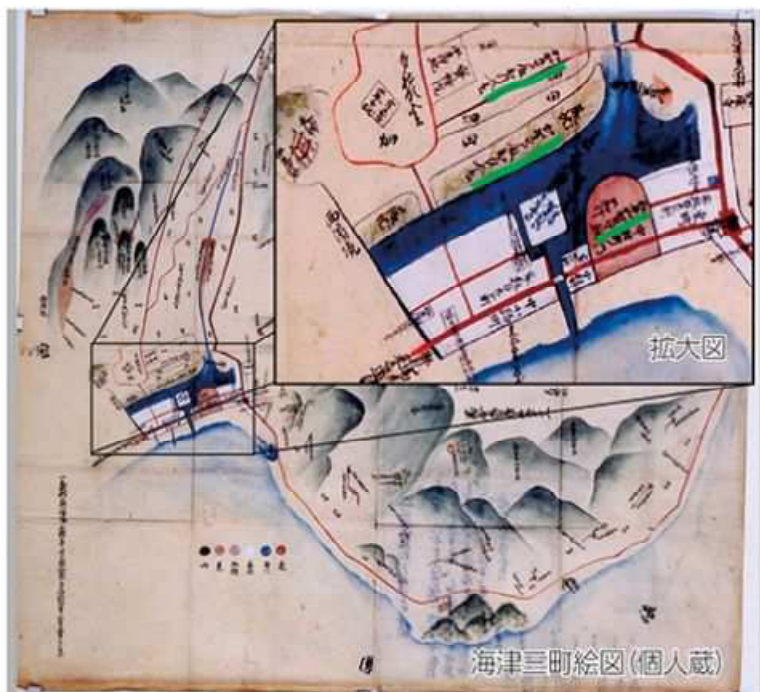
が



今津村では河原林甚右衛門が住吉神社付近に代官所を設け高島市内の加賀藩領の支配を行っていました。代官所内には蔵屋敷が設けられており、その蔵屋敷を波から守るための石積みが整備されていました。今も中浜周辺には、当時の石積みが残っています。代官を担った河原林家は前田家から今津姓を名乗ることを許され、その今津家の墓が今も今津町天神に残っています。

海津の絵図に残る加賀藩

また、江戸時代の海津のようすを描いた海津三町の絵図（個人蔵）にも加賀藩の名前が記されています。この絵図からも、海津の一部が加賀藩の所領となっていたことが明らかとなっています。



編集 雑感

ふと空を見上げると、青空にまるで絵に描かれたような大きな入道雲がよくみられるようになりましてね。最近仕事で写真を撮ることが多くなり、今まで何気なしで見ていた風景から季節の変わりをよく感じさせられます。

企画広報課では、写真・イラストを募集しています。みなさんの季節を感じる一枚をぜひご共有ください！

今年の夏は例年よりも暑くなるそうなので、夏バテ、熱中症には十分注意して、夏を満喫してくださいね。(A)

閩文化財課 (32) 4467

広報たかしま

平成30年

8

月号 No.223

発行 高島市

編集 政策部企画広報課

0740 (25) 8000代
http://www.city.takashima.lg.jp
info@city.takashima.lg.jp

大溝藩と分部氏

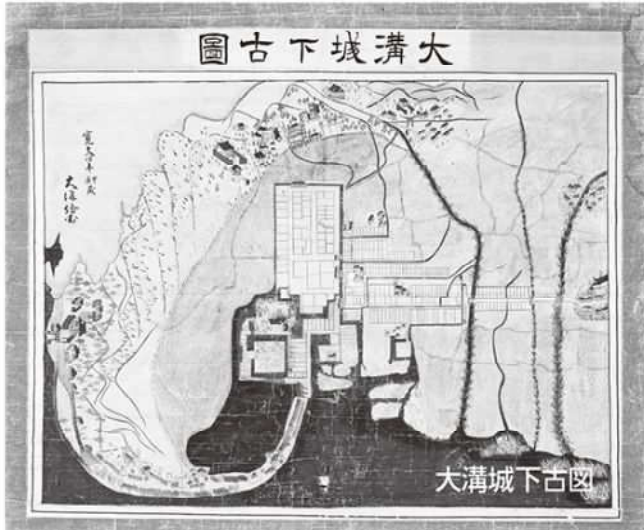
大溝城の誕生

高島市の南東部に位置する大溝地域の歴史は、奈良時代までさかのぼることができます。奈良時代を中心にとめられた万葉集の歌にあるように高島・大溝の地は、都と北陸を結ぶ陸路と湖路の要衝として発展しました。

戦国時代の終わりを、今から約440年前、江北の武将磯野員昌が高島へ進出し新庄に城

を構え、信長の甥にあたる織田信澄を養子に迎えました。

信澄は天正6年（1578年）明智光秀の設計をもとに新たに大溝に新しい城を築城します。この城は、天守閣を持つ近世城郭の幕開きを知らせる構造の城です。まさに近世の始まりを高島に伝え、下には郡内の商人や職人たちが集住してきます。その名残として今も南市本町・新庄本町・今市本町・南市中町・新庄中町・今市中町・今市新町・新庄新町の町名が伝えられています。



分部氏の入封

しかし、信澄の死後、大溝城主は代々入れ替わり、江戸時代の元和5年（1619年）には、伊勢上野（三重県津市）城主分部光信が大溝藩2万石の藩主として、家臣45人と上野城下の職人を伴い入封します。

大溝藩は、高島郡内32ヶ村・野洲郡内5ヶ村（他領

秋季特別展「大溝藩と分部氏」

～城下町の400年～

- ▶開催期間 11月3日（土）～25日（日）
- ▶開館時間 9時～16時30分
- ▶開催場所 藤樹の里文化芸術会館 展示室1
- ▶休館日 月曜日
- ▶料金 入場無料

特別展関連講演会「大溝藩と分部氏」

～城下町のくらしと大溝祭～

- ▼開催日 11月25日（日）
- ▼時間 13時30分～16時15分
- ▼場所 藤樹の里文化芸術会館 ホール
- ▼内容 講演1「城下町の形成と大溝藩」
八杉 淳氏（草津市立草津宿街道交流館長）
講演2「大溝祭と町人文化」
木津 勝氏（大津市歴史博物館 学芸員）
よもやま話「一期一会 大溝から学んだこと」
白井 忠雄（高島歴史民俗資料館 学芸員）

▼資料代 200円

▼参加申し込み・問い合わせ

高島歴史民俗資料館 ☎（36）1553

FAX（36）1554 ✉ shiryo@city.takashima.lg.jp

※10月3日（水）から受付開始

入組を含める）を治め、明治維新までの約250年間藩制を敷き、政治・文化・経済の発展に努めました。

来年は、大溝の地に分部氏が入封して以来400年の節目の年となります。その大溝藩と分部家を概観できる特別展と講演会を11月に藤樹の里文化芸術会館で開催します。ぜひご来場ください。

高島歴史民俗資料館

☎（36）1553

編集感

9月4日に台風21号によって今までにない暴風が高島市を襲い、甚大な被害と広範囲で長期に渡る停電が市内で発生しました。被害に遭われた皆様へお見舞い申し上げますとともに、1日も早い復旧を願っています。

今月号の広報たかしまでは、誌面作成中の災害であったことから急遽記事の差し替えを行い、台風による被害状況と支援体制を6～7ページに掲載しています。ぜひご覧いただき、情報共有をしていただきますとともに、今後の防災対策の参考といただければと思います。（H）



広報たかしま

平成30年

10

月号

No.225

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒520-1562 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎0740（25）80004

http://www.city.takashima.lg.jp
✉ info@city.takashima.lg.jp

キリシタンの奥方おくがた

17代当主朽木宣綱の妻

鎌倉時代から江戸時代にかけて朽木の地を治めていた、朽木家の17代当主朽木宣綱の妻は、「マグダレナ」という洗礼名をもつキリシタンでした。

彼女は、湖北の京極家当主京極高吉の娘で、母親は京極マリア（浅井長政の姉）とよばれるキリシタンでした。

朽木家へ嫁いできたマグダレナが、キリシタンとしてどのような生活をしていたかは定かではありませんが、2人の男子（長男竹松丸は、朽木家18代目当主の智綱、次男千代丸は峰山京極家の祖高通）を授かっています。

しかし、次男の千代丸を生んだ3年後の慶長11年（1606年）に、病のため亡くなったと伝わります。

マグダレナの葬儀

彼女の葬儀は、京都の下京四条に完成して間もないキリシタ

ン聖堂で行われました。その時のようすは、宣教師が本国に送った『耶穌会年報』（1606、07年のイエズス会の日本年報）の中に詳しく記載されています。そこには、「彼女の夫（朽木宣綱）は、葬儀を仏教僧に依頼したが、母の京極マリアがキリシタン葬を強く望んだので、夫の宣綱も最終的には承諾し、黒山の参列者の中、日本ではまったく新しく盛大な式典が執り行われた」と書かれています。



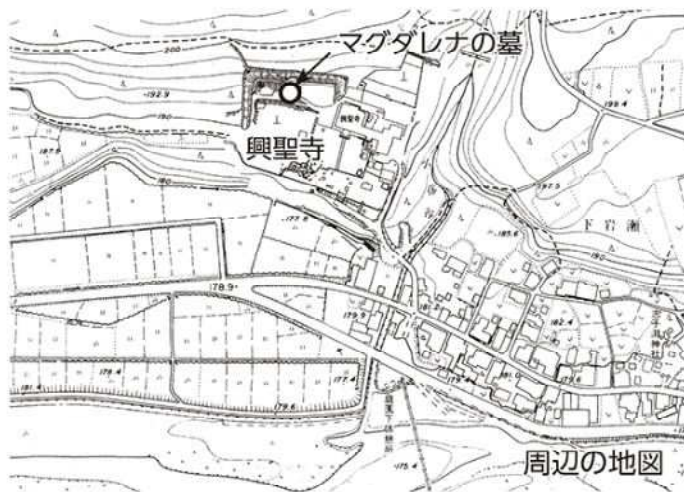
マグダレナの墓

しかし、彼女の葬儀から間もない慶長17年（1612年）には、江戸幕府によるキリシタン禁令が出されるなど、幕府の取り締りは強化をたどり、元和4年（1618年）の京極マリアが亡くなったころには、キリシタンによる表立った活動はほとんどなくなり、急速に衰退していったとされています。

仏教徒となったマグダレナ

幕府の目を恐れた朽木宣綱は、妻マグダレナが仏教徒であったことをアピールするために、岩神館の跡地（現在の朽木岩瀬の興聖寺）に、その菩提を弔うために秀隣寺（当初は周林寺）を建立し、「秀隣寺殿桃岩永悟大禅定尼」の戒名を授与し、境内に墓を建てました。建てられたマグダレナの墓は、今でも大切に興聖寺の境内に祀られ静かにたたずんでいます。

岡文化財課 ☎ (32) 4467



周辺の地図

編集者感

平成最後の一年は、災害に多く見舞われますね。形として残っていた思い出まで、一瞬にして奪っていく災害は本当に恐ろしいものだと思ってしまう。さて、平成も残り6か月となりました。毎年やってくる年末とは違って、年号が変わる前に“何か残したい！”なんて思うのはご共感いただけるでしょうか？ 思いきれずにいることを始めるには、ちょうどよい時期かもしれません。平成の思い出の一つにしてみるのも良いかもしれませんね。(A)



広報たかしま

平成30年

11

月号
No.226

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑5-5番地

☎ 0740(25) 80004
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

高島市の明治維新

明治の始まり

今年2018年は明治維新からちょうど150年にあたる年で、各地で記念行事や当時の状況を伝える展示会などが開催されました。

明治元年となった1868年は、1月に戊辰戦争の始まりとされる鳥羽・伏見の戦いが起こり、4月には、江戸へ進撃した新政府軍が江戸を無血占領しました。7月に江戸が東京と改称され、9月には元号が「明治」となりました。東北では旧幕府軍の反乱が続く一方で、新政府は外国との修好通商を進め、新しい時代の体制作りが着々と進められていきました。

このように明治元年は旧幕府軍の反乱の鎮圧と新政府の始動によって幕が開きましたが、当時、高島市域に住んでいた人々は、この明治維新をどのように感じていたのでしょうか。

今津村に残る記録

旧今津町役場に残されていた明

治時代初期の行政記録を見てみると、明治元年（慶応4年）1月、

金沢藩領であった今津村に、旧幕府軍を支援するための出兵や、金沢から派遣された役人の食料手配等が命じられ、実際に今津村から京都に93人が遣わされました。さらに同じく金沢藩領であった弘川村、海津中村町を含めた3村には、「急な事情のため」という理由で御用金の差し出しが命じられました。

当時の村人たちにとって、京都の情勢はまだしも、江戸城が開城したことや年号が「明治」になったことが身近な出来事であるとは考えにくく、恐らくは、江戸時代以来の領主からの命令で、都の緊迫した情勢を感じ取ることが、最初に感じる明治維新であったのではないかと考えられます。

大溝藩主から大溝藩知事へ

また、市内では唯一大名領主の本拠地であった大溝の地では、藩主の言葉や立場が、人々の暮らし

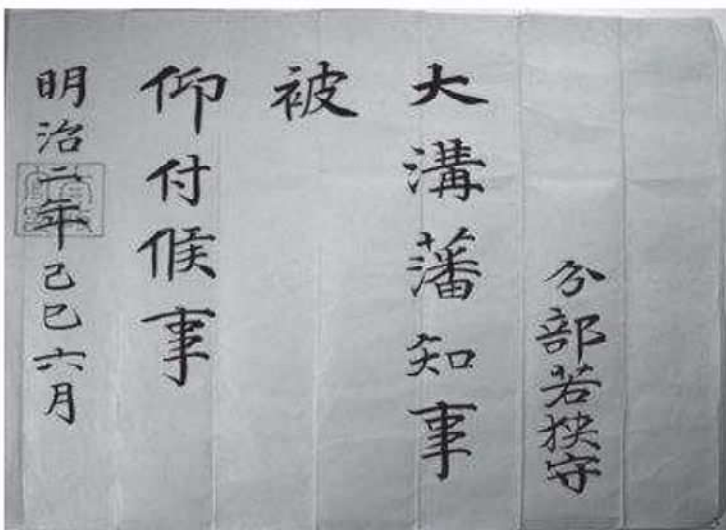
に影響を与えていくことになりました。

この時の大溝藩主であった分部光貞は、幕末から禁裏（御所）の諸役を多く勤め、皇女和宮の江戸降嫁の行列警護や洛中警備の仕事にあたっていました。そうした経緯からか、早い段階で倒幕の立場を明確にし、明治元年10月には、新政府の方針に合わせて、大溝藩の藩政組織の改革に取り組み始めました。

翌明治2年（1869）6月、藩主が領地・領民を天皇に返還する版籍奉還が決定すると、光貞は直ちに奉還の手続きを進め、同月22日には、大溝藩知事となりました。この時光貞は、解藩後の藩士の動揺を配慮してか、幕政が終わり、新しい時代になったことへの自身の考えと、分部家への協力と藩士の進むべき道を諭した「告諭文」を記しています。

大溝藩士達は、藩の解体というこれまでに想像もしなかった大きな出来事を、藩主自らの文章で現実として捉えていったのではないのでしょうか。

閩文化財課 ☎ (32) 4467



藩知事を命じられた「藩知事辞令」

編集
雑感

皆さん、朽木おにゅう峠の紅葉と雲海は見に行かれましたか？

11月3日（土）に雲海が発生する気象条件と紅葉の見ごろが重なり、おにゅう峠には全国各地からフォトグラファーが集まっていました。

日の出とともに歓声があがり、一斉にシャッター音が響き渡りました！私も撮影に成功しましたが、それよりも、住民であることに誇りを感じた最高の瞬間でした。見に行けなかった方は、公式インスタグラムなどでも紹介していますので、ぜひご覧ください！（Y）



広報たかしま

平成30年

12

月号
No.227

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒502-0156 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740(25) 80004
http://www.city.takashima.lg.jp
✉ t-info@city.takashima.lg.jp

日爪の城

第18回近江中世城跡琵琶湖一周のろし駅伝には、今年は市内5か所の山城が参加を予定しており、10時30分ごろから順にのろしのリレーが行われる予定です。（詳細は下欄記事参照）参加山城の一つ日爪城をご紹介します。

高島市の中世城館跡

市内には、80を超える中世の城館跡が存在すると言われています。お城というと、江戸時代の豪

壮な天守や大規模な石垣、堀等を持つものを連想しがちですが、中世の城館跡は、領主が居住する平屋造りの建物であったり、戦の途中で使う砦のような建物であったりする場合が多く見られます。現

遺構と伝承



日爪城土橋

のろし駅伝参加山城の一つである日爪城は、新旭町饗庭の日爪集落南西の「城山」と呼ばれる丘陵上に位置しています。創建には、室町時代に書かれた史料に「山門領荘官」として登場する日爪氏が関わったといわれ、この日爪氏は、中世、新旭町北部一帯を支配下においていた饗庭氏の一族であると伝わっています。

遺構は、標高195mに位置する東曲輪群と、標高207mに位置する曲輪（主郭）に区分されます。東曲輪群は、南北約58mの横

堀によって尾根の東端が遮断されていますが、横堀には土橋が残っていて、曲輪に上る通路に直結していることから、大手の遺構だと推定されています。

曲輪（主郭）は、東西約20m×南北約38mの長方形の区画で、西・南面にL字形の土塁がめぐらされています。また主郭から南西方向の尾根上には、4条の堀切が設置されています。

なお、城跡の山麓、現在の日爪集落の南西背後の竹やぶ付近には、「ネゴヤ」と呼ばれる場所があり、ここは城の創立に関わった日爪氏の館跡とも伝わります。「ネゴヤ」は「寝小屋」とも考えられ、日爪氏の常住の館跡である可能性が高いと考えられています。地域では、この場所は「慈恩寺跡」とも伝えられ、早い段階で何らかの施設が建てられていたことがわかります。

日爪城から約一キロ南には、国史跡の清水山城館跡が残されています。急斜面に囲まれ、防御性の高い造りとなっている日爪城は、清水山城館跡の出城とも伝えられ、その役割、存在価値が注目される山城の一つといえます。

関文化財課 ☎ (25) 8559

市内の山城5つが参加 2019のろし駅伝開催

琵琶湖周辺の中世の山城跡においてリレー形式でのろしを上げていく「近江中世城跡 琵琶湖一周のろし駅伝」が開催されます。高島市では下記5か所の山城跡で、市内の各実行団体によりのろしが上げられます。詳しくは文化財課へお問い合わせください。

▼開催日 11月23日（土）

【山城 発煙時刻】

打下城	10:32	清水山城	10:36	日爪城	10:40
伊井城	10:44	田屋城	10:48		

編集 雑感

この4月に社会人になってからというもの、運動をする機会がめっきり減ってしまいました。そのせいか、今年の夏は毎日バテバテで・・・顔も丸くなったような・・・これは、運動をして体力をつけねば！

何か始めるにはもってこいの秋、私は軽いジョギングを始めようと思います。健康のため、体力づくりのため、生活習慣病予防のため、そして何より来年の夏を元気に楽しむために、今からがんばるぞ〜！（YH）



広報たかしま

令和元年

11

月号
No.238

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒240-0299 滋賀県高島市新旭町北畑5-5番地

☎ 0740 (25) 8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

記録に登場する田中城

大河ドラマの主人公として注目を集める明智十兵衛光秀は、安曇川町田中に城跡が残る田中城（上寺城）に深い関わりがあったことが分かっていきます。今回は、そのことを示すいくつかの資料を紹介いたします。

『信長公記』への登場

江戸時代初期に太田牛一^{おおたぎゅういち}という人物があらわした『信長公記』^{しんちやうこうき}は、天下統一を目指した織田信長の一代記として知られています。著者の太田牛一は、信長の右筆^{ゆうひつ}（秘書役）として長年信長に仕えた人物です。その太田牛一が実際に自分で見た事実を含めて正確に記しているのが、史料としての信頼性は高いと考えられています。

その『信長公記』に「高島郡の田中の城」が3回登場し、そのうち2回には明智光秀が関係しています。

田中城は、安曇川町田中の上寺集落の背後の山に遺構が残る山城で、松蓋寺という寺院の跡を再

利用して造られました。城を築いたのは、近江源氏・佐々木氏の一族で、田中周辺を本拠地としていた田中氏であると考えられています。

1回目の登場は、元龜元年（1570）の4月に、織田信長が京から越前へ向かう途中で、高島の田中の城に泊まったという記録です。この時、信長は越前の朝倉義景を討つために湖西を通り、途中、自分の妹婿であった浅井長政の勢力下にあった田中城に宿泊



田中城跡からの眺望

したと考えられます。

この直後、浅井長政は信長に離反し、田中城は、信長の敵方の城となりました。『信長公記』での次の田中城の登場は、元龜3年3月に信長が高島郡の浅井・朝倉軍を攻撃した時の記録で、この時、明智光秀は信長軍の将の1人として、田中城を攻撃しています。

翌元龜4年7月に田中城は落城し、『信長公記』にはその時のようすも記されます。これが田中城の3度目の登場になります。この時、信長は「大船」を使って湖上からの攻撃を行い、同時に陸上では「木戸・田中両城」を攻めたと書かれています。そして、降参した木戸城と田中城を与えられたのが、明智十兵衛光秀である、と『信長公記』は伝えています。恐らくは、この戦での光秀の働きが大きかったためだと思われます。

新発見の古文書

最近、この田中城が登場する新発見の資料として紹介されている古文書があります。熊本藩の家老を世襲した米田家に伝来した文

書群の中の1点です。この文書は、本来の文書の裏に書かれたもので、いつの時代かに転写されたものと考えられますが、内容は、永禄9年（1567）に明智光秀が田中城に籠城していたことをうかがわせるものです。先に紹介した『信長公記』の記事以前に、光秀が本営に田中城にいたことがあったのか、現段階では確実なことは分かっていません。ただ、このように古い記録を確認したり、新しく発見された古文書を検証したりすることで、今後、新たな事実が明らかになっていくでしょう。

岡文化財課 ☎（25）85559

編集感

令和元年度もこの3月でいよいよ終わりを迎えますね。本年度は皆さんにとってどのような年度だったでしょうか。

昨年の4月から新しい場所で新しい生活が始まった方もたくさんおられたと思います。

わたし自身は、広報担当となつて3年が経過しようとしています。まだまだ力不足ですが、広報チーム一丸となつて、今後も創意工夫を重ねて、読みやすく身近に感じてもらえる「広報たかしま」をお届けしていきます。

よろしくお願いします！（Y.O）



広報たかしま

令和2年

3

月号

No.242

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課
〒520-1159 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740 (25) 80004
http://www.city.takashima.lg.jp
✉ info@city.takashima.lg.jp

高島市無形民俗文化財 竹馬祭

子ども版 七川祭

清水山城下の集落である今市区の佐々木神社では、5月3日に竹馬祭が行われています。この祭は、5月4日の大荒比古神社の例祭である七川祭の子ども版ともいわれ、15歳ぐらいまでの子どもたちが主体で神事を行う例祭で、高島市無形民俗文化財に指定されています。

今市区の佐々木神社は少彦名命を祭神としており、もとは佐々木天王社といいました。勧請の年代は定かではありませんが、慶長12年（1607年）に社殿が造営さ



やぶがきめ 流鏑馬のようす

れ、宝永3年（1706年）と文政12年（1829年）に改築が行われました。現在の社殿は、昭和11年（1936年）に再建されたものです。

4月3日、その年の流鏑馬当番の子どもたちが、行事の無事を願って神社へ参拝します。それから作法や順序の練習を始め、5月2日の宵宮には、本祭りと同様に正装で参拝と流鏑馬の奉納を行います。竹馬祭当日、紺の着物に陣笠をかぶり、背には家紋などを染め抜いた旗指物をして、馬に見立てた竹馬にまたがり本馬場・横馬場を駆け回ります。この行事の一連の流れは七川祭とよく似ており、異なるのは主役が子どもたちで、生きた馬が竹馬になっているということです。使用する竹馬は、20cmほどの桐の木で作られた頭に苧を黒く染めたたてがみと手綱をつけ、子どもの体に合わせた竹の棒で胴を作り、できあがった竹馬

を首からかけてまたがり流鏑馬を奉納します。

竹馬祭のはじまり

竹馬祭の起源について、はっきりとは分かっていませんが、鎌倉時代に高島郡田中郷の地頭であった佐々木高信が大荒比古神社の社殿を改築したときに競馬を奉納したのを、子どもたちがまねて遊んだことで伝えられたと考えられています。また一説には、織田信長との戦いの際に清水山城から男衆が出払ってしまったため、残った女性と子どもたちが竹馬にまたがってぐるぐると回ることによって、清水山城にまだ兵が残っていると見せかけて敵を追い払ったことに始まるともいわれています。

また、隣の辻沢区でも5月5日の子どもの日に竹馬祭が行われます。

現在の竹馬祭

竹馬祭の参加者は減少傾向にあるものの、地域の方々によって今日まで続けられています。ぜひ、

迫力満点な七川祭だけでなく、竹馬祭のかわいらしい子どもたちの勇姿もご覧になってみてはいかがでしょうか。

文化財課 ☎ (25) 8559



佐々木神社

編集感

新しいコトが動き出す4月。毎年4月になると、1年間ってあっという間だなあと感じます。年を重ねるたびに、月日が経つのがどんどん早く感じますが、この現象を心理学的に「ジャンーの法則」と説明されているそうです。つまり、これから時間のスピードは増すばかり、…。ひえ～！

猛スピードで過ぎていく日々をただ流されるだけでなく、本年度は積極的に新たな挑戦をすることを目指し充実した日々を過ごせるよう、がんばろうと思います！（Y.H）



広報たかしま

令和2年

4

月号
No.243

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

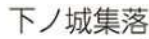
〒250-1562 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740 (25) 8000(代)

http://www.city.takashima.lg.jp
mailto:info@city.takashima.lg.jp

田中氏の居館

高島七頭が台頭したころ、田中氏は田中郷の中心地であった下ノ城集落に居館を構えたとされています。田中氏が領有した田中郷は、現在の大字田中にあたる場所とされており、近世においては南市村・三田村・馬場村・下ノ城村・上寺



下ノ城集落周辺は現在、水田地帯が広がっており、田中氏の居館が存在した痕跡は、地表には見受けられませんが、周囲の小字名がその存在をうかがわせています。現在の下ノ城集落から、その南方に横断している県道安曇川・高島線までの水田が「南堀」、その反対方向にあたる集落の北方の水田が「北堀」、集落の東方の水田が「東堀」という小字名がついており、この範囲に田中氏の居館が存在していたと考えられています。西堀という字名はありませんが、江戸後期の田中村絵図には「西ノ口」という地名が残されており、その地域の中に田中氏の居館の正面入り口が存在したことがうかがえます。また、「堀」という地名がそれぞれ付くことから、周囲に堀を巡らす居館であったと考えられます。

これまでの現地調査から、下ノ
城集落は周辺の水田よりもやや高

い位置にあり、集落の北辺が東西にまっすぐ区画されていることが分かっています。この北辺に接する水田は幅約7mで東西に延びており、この水田が田中氏の居館の北堀跡であると考えられます。

下ノ城集落内の範囲は、「下ノ城遺跡」という名称で城館跡の埋蔵文化財包蔵地として周知されています。北堀跡と想定される場所の周囲で実施された発掘調査では、堀跡が検出されているほか、堀跡のすぐ傍で木柵や溝・土坑といった遺構が検出されるなど、田中氏の居館の一端が明らかになりつつあります。

問 文化財課
☎ (25) 8559

また、公式 Instagram では、少しでも皆さんの気持ちが和らぎますようにと、市内の素敵な風景をほぼ毎日配信しています。こちらも併せて、おうちでの楽しみ方の一つとして取り入れていただければ幸いです。(Y.O)

集感
編雜

☎ 0740 (25) 8000(代)
🌐 <http://www.city.takashima.lg.jp>
✉ t-info@city.takashima.lg.jp